

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2023

課題番号：16K03724

研究課題名（和文）労働者の異質性によって生じる富と所得の不平等に関するマクロ動学分析

研究課題名（英文）Macroeconomic analysis of wealth and income inequality due to worker heterogeneity

研究代表者

大野 隆 (OHNO, TAKASHI)

同志社大学・経済学部・教授

研究者番号：40388806

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、労働者の異質性が資産格差や所得格差に与える影響とともに、マクロの安定性に与える影響を考察することを目的とした研究である。この視点から、論文を4本公刊するとともに、学会報告を2回、研究会報告を2回行った。また、投稿中の論文が、それとは別に1本ある。これらの研究を通して、労働者の異質性が、資本家と労働者に分離すると理解できるとともに、その階級の違いが、経済の不安定性に与える影響について、各方面（資産、技術、貸借関係）を通じた効果について、ポストケインズ派経済学のハロッドモデルやカレツキアンモデルを用いて、考察を行った。その結果、資本主義経済の不安定性と安定化の要因を明らかにしたと言える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

資本主義経済の安定性について、古くから議論が行われている。特に、非主流派経済学は、資本主義の不安定生を主張した。本研究では、生産性の異質性がもたらす階級の形成の結果、資本主義経済が不安定になる要因の分析とともに、労働市場、金融市場といった企業の行動や制度が安定化の要因となることを、ポストケインズ派経済学のハロッドモデルやカレツキアンモデルを用いて考察を行った。その結果、資産・技術選択・貸借関係が安定化効果をもたらす可能性がある点を明らかにできた。これは、資本主義には、その安定化をもたらすさまざまなメカニズムが存在することを明らかにしたものである。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine the impact of worker heterogeneity on macro stability as well as on asset and income inequality. We have published four papers (one paper is refereed journal), as well as presented two conference and two research meeting. In addition, there is one other paper under submission. Through these studies, the heterogeneity of workers can be understood as separating capitalists and workers, and the effects of their class differences on economic instability through various dimensions (assets, and technology), using the Harrodian model and the neo-Kaleckian model of post-Keynesian economics. The results of the study are discussed. As a result, we can say that we have identified the factors that destabilize and stabilize the capitalist economy.

研究分野：ポストケインズ派経済学

キーワード：ポストケインズ派経済学 政治経済学 技術進歩 ハロッドモデル 資本主義経済

1. 研究開始当初の背景

Piketty 著『21世紀の資本』(2014)は、資本所得に起因する階級間の資産格差の拡大と、賃金格差による階級内の格差の拡大を指摘した。前者の資産格差の拡大は、その要因および、階級間の資産格差の拡大がマクロ経済の経済成長や安定性に与える影響に対して、精力的に研究がなされている。他方、後者の格差拡大はマクロ経済学で見過ごされた感が否めない。

2. 研究の目的

本研究は、労働者の異質性を導入することで、労働者と資本家の階級の内生的決定とともに、さまざまな制度が経済の安定性や経済成長率に与える影響を考察し、政策提言を行う。特に、金融的側面や技術的側面、労働政策的な経済政策の側面から、経済の安定性に影響を与えることを目的とする。

3. 研究の方法

企業の参入退出を明示した基本モデル(Ohno(2013))に、労働者の異質性(生産性の違い)による給与格差、そしてそれによって生じる保有資産の非対称性を組み込んだモデルを開発する。その結果、有効需要を明示した不安定なモデルが構築され、労働者と資本家の境界値の内生的決定、安定性の関連を明らかにする。この研究は、ポストケインズ派経済学のネオカレツキアンモデルやハロッドモデルにおける階級のミクロ的基礎づけと言える。その上で、ポストケインズ派経済学の特にハロッドモデルの不安定性に着目し、その安定性について、金融的側面、技術的側面について考察を行った。

4. 研究成果

(1)「生産性格差と資産格差のマクロ分析」『立命館経済学』65巻第6号に掲載

本研究では、企業の参入退出を明示した基本モデル(Ohno(2013))に、労働者の異質性(生産性の違い)による給与格差、そしてそれによって生じる保有資産の非対称性を考察した。労働のみをする労働者とともに、資産を保有し、利子所得も得る労働者と、企業経営をし、企業家利得も得る3グループを明示化した。その上で、能力の差によって、企業経営の際に発揮される生産性が高い場合もあれば低い場合もあると想定した異質性を導入し、階級を内生的に導出するようなモデルを構築し、資産分布の多様性を考察した。その結果、資産総額は初期の大きさから変化しないことが明らかとなった。しかし、利子所得者の資産は均一化するが、企業経営者の資産は均一化せず、生産性に依りて大きくなることがあきらかとなった。このように生産性格差に起因する資産格差の歪みが明らかとなり、研究の目的の第一段階は達成された。本研究は経済理論学会第64回大会にて報告した。

(2)「The Keynesian stability condition with free entry in the Kaleckian model」

本研究は、労働者の異質性によって生じる富と所得の不平等に関するマクロ動学分析に焦点を与えた研究である。労働分配率に与える影響を考察することに注力した。なぜなら、近年、Autorなどにより、スーパースター企業が労働分配率を低下させる要因であることに注目されているからである。その点に関して、政府の財政支出とスーパースター企業の関係性が、労働分配率に与える影響を考察した。カレツキアンモデルを用いた本研究は、International Conference on Economic Theory and Policy (明治大学:2018年9月)、KMSG(Kobe macro Study Group)のワークショップ(北海道大学)にて報告を行った。

これらの研究から、労働者の異質性は、生産性が低いと採算が取れないために生産(企業)ができない。そのため、労働者にならざるを得ない。他方、生産性が高い労働者は企業経営の採算が取れることを明らかにし、企業を経営できる人と、企業を経営できずに労働者とならざるを得ない人に内発的分けられることを明らかにした。それは、企業の独占度を規定する。そのような労働者と企業(資本家)の二極化は、マルクス経済学やポストケインズ派経済学の階級を内発的に説明したと解釈することができる。その上で、以下のような研究を進めた。

(3)「貸借関係を考慮したハロッド・モデル-SFCモデルでの展開」『経済学論叢』 72(3) 393 - 411, 2020年12月,

本研究では、ハロッドモデルに資産負債を明示したストックフローコンシステントモデルを用いて、経済の安定性について考察を行った。特に、生産性の違いがもたらした資産保有の非対称性が、景気循環の安定性に与える影響を考察し、ハロッド・モデルの安定性について、各主体の貯蓄性向が大きな役割を果たすことが明らかとなった。この結果、不安定なハロッド・モデルの安定化要因として、労働者の異質性に起因する富の不平等性が大きな要因であることが明らかとなった。

(4)「Capital-labor conflict in the Harrodian model」 Evolutionary and Institutional Economics Review 19 301-317, 2022年

本研究では、ハロッドモデルの投資関数を、Bhaduri-Marglin型を参考とした投資関数に修正し、企業の投資行動をより現実的に設定した。通常、ハロッドモデルは、稼働率が蓄積率の変化分に影響を考へるが、本研究では、利潤分配率も蓄積率の変化分に影響を与えると想定した。その上、利潤分配率が産業予備軍効果によって変化する場合をも考察し、均衡の存在条件について、より詳しい条件が必要であることが導出された。その結果、様々な投資関数を持つ企業がいることで、経済が安定化する可能性が明らかとなった。

(5)「資産の非対称性を考慮したハロッド・モデル」『経済学論叢』 73(4) 349 - 367, 2022年03月

本研究は、不安定なハロッドモデルの安定化の条件を明らかにしている。その結果、産業予備軍効果が弱すぎても不安定となるが、強すぎても不安定となることが明らかとなった。この研究によって、原理的な不安定な資本主義経済であったとしても、産業予備軍効果が一定の大きさであるならば、経済が安定化することが明らかとなった。言い換えれば、異質な投資関数の集合体として、ハロッドモデルを考へるならば、経済の主体の異質性を考慮した企業行動をハロッドモデルにて考察を行ったといふことができる。

(6) The race between real wage and automation in the Post-Keynesian model(小暮憲吾氏との共同論文)

本研究は、企業の生産性格差という異質性が資産格差や所得格差に与える影響、とともに、マクロの安定性に与える影響を考察することを目的とした研究である。具体的には、インフレーションコンフリクトモデルを援用し、賃金技術コンフリクトモデルを設定した。この設定によって、日本の定型化された事実と言われている、先進国諸国と比べて、低経済成長、底労働生産性上昇、低賃金を理論的に説明することを試みた。その結果、賃金主導型成長レジームであったとしても、技術進歩のインセンティブが、目標利潤シェアや賃金であれば、定型化された事実を説明することが困難であることが明らかとなった。他方、失業率によって、技術進歩が決定される場合、定型化された事実、賃金圧力の減少によって説明できることが明らかとなった。本研究は、2022年8月のSWET(小樽)、9月の共共研究会(オンライン)2023年の3月の進化経済学会(立教大学)にて報告し、海外専門誌に投稿準備中である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 大野隆	4. 巻 73
2. 論文標題 「資産の非対称性を考慮したハロッド・モデル」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『経済学論業』	6. 最初と最後の頁 349-367
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大野隆	4. 巻 72
2. 論文標題 貸借関係を考慮したハロッド・モデル;SFCモデルでの展開	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 経済学論業	6. 最初と最後の頁 393-411
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ohno Takashi	4. 巻
2. 論文標題 Capital-labor conflict in the Harrodian model	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Evolutionary and Institutional Economics Review	6. 最初と最後の頁 301-317
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s40844-021-00199-0	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大野隆	4. 巻 -
2. 論文標題 景気循環論：マルクスの視座の真の理論化に向けて	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 「されどマルクス」	6. 最初と最後の頁 59-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大野隆	4. 巻 65
2. 論文標題 労働者の異質性によって生じる富と所得の不平等に関するマクロ動学分析	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 立命館経済学	6. 最初と最後の頁 89-103
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大野隆	4. 巻 117
2. 論文標題 書評「中嶋哲也著『経済発展と格差 - 簡単な家計モデルによる検討 - 』」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 経済学雑誌	6. 最初と最後の頁 115-116
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 大野隆
2. 発表標題 The race between real wage and automation in the Post-Keynesian model
3. 学会等名 進化経済学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大野隆
2. 発表標題 参入退出を考慮したハロッド・モデル
3. 学会等名 進化経済学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大野隆
2. 発表標題 The Keynesian stability condition with free entry in the Kaleckian model
3. 学会等名 Kobe Macro Study Group
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大野隆
2. 発表標題 The Keynesian stability condition with free entry in the Kaleckian model
3. 学会等名 International Conference on Economic Theory and Policy
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大野隆
2. 発表標題 労働者の異質性によって生じる富と所得の不平等に関するマクロ動学分析
3. 学会等名 経済理論学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 大野隆
2. 発表標題 Cash constraint in the Harrodian model
3. 学会等名 進化経済学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 大野隆	4. 発行年 2018年
2. 出版社 日本評論社	5. 総ページ数 6
3. 書名 景気循環論（「されどマルクス」所収）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

The 6th Summer School on APE https://sites.google.com/site/4thsape/

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------